

雑言詩「贈野陸州歌并序」について

中 谷 征 充

一 はじめに

空海の生きた平安初期は、我国の文化史上で稀に見る唐風文化が隆盛した時である。後世の史家達の述べるところによると、このことの最大の要因は、嵯峨天皇が主唱した事にある。その当然の結果として嵯峨帝を取巻く文人官僚達が生まれた。嵯峨帝の即位後その命により、空海は唐から帰朝後初めて、筑紫より入京を許される事となった。入京するや嵯峨帝の求めに応じ、唐代最新の詩集・書などを献上した。その経緯などを勘案すると、嵯峨帝は空海を最初密教の阿闍梨と見るよりは、文人・書家としての才能を高く評価したと思われる。

嵯峨帝の空海に対する評価を敏感に感じ取った文人官僚達は、恐らく競って空海との交友を求めたに違いない。小野岑守もその中の一人である。両者の交友の跡を示すものとして、ここで、取り上げようとする「贈野陸州歌并序」（『遍照發揮性靈集』巻一）がある。他に、空海から贈られた詩（残念ながら散逸して現存しない）に対する岑守の答詩「歸休獨臥寄高雄寺空上人」（『經國集』巻十）がある。また、岑守が陸奥の任地で書いた離合詩「在邊贈友」（『文華秀

麗集』巻上)がある。この詩は必ずしも、空海の方に宛てた詩とは言えないが、「友」の中の一員に空海も入るだろう。これ以外に確定している訳ではないが、岑守宛ての可能性のある空海書簡「孟春餘寒」一通が残されている。^⑧

小野岑守(七七八〜八三〇)は嵯峨天皇の春宮時代にその侍読^⑨となり、以後嵯峨即位に伴い順調に出世して行く、嵯峨帝の郎党の一人である。宝龜九年(七七八)生まれで、延暦五年(七八〇)生まれの嵯峨帝の八歳年長である。空海の四歳下になる。嵯峨帝との奉和詩も多く、最初の勅撰漢詩集『凌雲集』の編纂に携わり、嵯峨帝の二十二首に次いで十三首が所収された。その後の『文華秀麗集』『経國集』にも夫々八首・九首が所収されている。優れた作も多く、この時代を代表する文人・詩人である。

官僚・行政官としても勝れていて、数々の事績を残している。主題の陸奥守として赴任中に、反大和朝廷の蝦夷の部族を懐柔して、帰順せしめ、それを嘉尚する勅を受けている。^⑩ 太宰大式として赴任中には、大宰府管内の実情に則し、四年を限り公営田を設ける事と、福利政策として始めての大宰府に行路病者のための統命院を設置する事などを申請し、画期的な政策を実施している。中央では『内裏式』『日本後紀』の編纂に従事している。^⑪

この小論では、雑言詩「贈野陸州歌并序」の読みと解釈で詩の観賞を行い、押韻・平仄等を検討し、問題点があれば、それを摘出し、論及しようと考えている。漢詩の平仄・押韻については、○が平声・●が仄声、◎が平声の押韻・◆が仄声の押韻と表記する。尚、韻は『大宋重修廣韻』(五卷本・『四部叢刊』所収)を用いた。

二 解釈と詩型

二(1) 本文と書き下し

この詩は小野岑守が弘仁六年正月十日、陸奥守に任じられた時〔公卿補任〕弘仁十三年、尻付に、空海が贈った詩である。以下、序は書き下しを載せ、詩は各句に番号を付け、最重要の二・四不同、二・六通の平仄と押韻を記載する。

序

戎狄馴れ難く邊笊感じ易し。古へ自り有り、今何ぞ無からん。公大廈の材を抱いて、出でて豺狼の境を鎮む。堂中には久しく定省の養を闕き、魏闕には遠く龍顔の詔を阻てたり。天理歡然すべしと云うと雖も、人情豈感歎すること無からんや。貧道と君と遠く相い知れり、山河雲水何ぞ能く阻てん。白雲の人、天邊の吏、何れの日か念うこと無からん。聊か拙歌を拙んでて、以て邊霧の頤を解くに充つ。

詩

- | | |
|-----------|------------|
| 1 日本麗城三百州 | 2 就中陸奥最難柔 |
| 3 天皇赫怒幾按劍 | 4 相將幄中争馳謀 |
| 5 往帝伐 | 6 今上憂 |
| 7 時時牧守不能劉 | 8 自是古將軍悉啾啾 |
| 9 毛人羽人接境界 | 10 猛虎豺狼處處鳩 |

11 老鷗目●

13 髻中插●著骨毒箭●

15 不●田●不●衣●逐●麋●鹿●

17 羅刹流◎

19 時●時●来●往●人●村●里●

21 走●馬●弄●刀●如●電●擊●

23 苦●哉●邊●人●每●被●毒●

25 我●皇●為●世●出●能●鑑●

27 千●人●萬●人●舉●不●應●

29 山●河●氣●

31 允●武●允●文●得●自●天●

33 鵬●翼●一●搏●睨●此●境●

35 凶●兵●蒞●倉●待●冶●鑄●

37 不●戰●不●征●自●無●敵●

12 猪●鹿●裘◎

14 手●上●每●執●刀●與●矛●

16 靡●晦●靡●明●山●谷●遊◎

18 非●人●儔◎

20 殺●食●千●萬●人●與●牛●

22 彎●弓●飛●箭●誰●敢●囚◎

24 歲●歲●年●年●常●喫●愁◎

26 亦●咨●焉●刃●局□□

28 唯●君●一●箇●帝●心●抽◎

30 五●百●賢◎

32 九●流●三●略●肚●裏●吞◎

34 毛●人●面●縛●側●城●邊◎

36 智●劍●滿●胸●幾●許●千◎

38 或●男●或●女●保●天●年◎

「局」は入声「決」韻

「換韻」

「換韻」

39 昔聞嬌帝干儂術
 41 京邑梅花先春開
 43 邊城遲暖無春藥
 45 高天雖高聽必卑
 47 莫愁久住風塵裏

40 今見野公略無匹
 42 京城楊柳茂春日
 44 邊壘早冬無茂實
 46 況乎鶴響九臯出
 48 聖主必封萬戶秩

二(2) 大意

空海の表現した主旨について、簡単に述べておきたい。この詩は序文と詩とからなり、詩は第二十九句と三十九句で換韻されている。普通換韻は一つの解毎に行う。解とは詩の中で一つの文節を表す。つまりこの詩は三つの解、即ち三つの文章から成り立っている。序は、蝦夷の住む辺境の地へ赴く岑守の気持ちを思いやり、辺境の官吏と山の修行僧として、お互いに離れたが、旧来の友情は変わらない、詩を贈るから慰みにしてもらえばよい。第一解は、人間とは思われない程の蝦夷人の様子を活写して、彼等を鎮撫するのが日本国の昔からの最大の課題であり、代々の帝が頭を悩まして来た。その重要な役に岑守が選ばれたのである。第二解は、岑守の才能が抜群な事を讃え、その才能をもってすれば、蛮地に平和がもたらされ、民も長生できるだろうと結ぶ。第三解は、辺境の地と都の様子を対比して、その住み難さを思いやり、辛抱すれば貴方の功績に対して帝は必ず御報いになると慰めている。

二―(3) 解釈

この詩全般の表現・言葉使いは、嵯峨朝文壇に特徴的な表現が顕著である。それは、我国の景物・風土・領土を中国唐土のそれに比定して表現する事である。即ち、陸奥を唐土漠北の辺塞の地に比定して表現されている^⑧。恐らく、嵯峨帝の好事が、彼を取り巻く文人達に暗黙のルールとなつて、比定する事物に合致した本場の漢詩表現を取り入れ、制作したものと考えられる。空海もまた、この虚構を楽しんだに違いない。この詩には、躍動感が溢れ、送別の詩であるが、深刻な気分が少なく、遊び心が横溢しているように感じられる。

序文の「白雲之人」「天邊之吏」は空海自身と岑守を對比させて、表現している。語句としての「白雲」は『詩経』『小雅・白華』に「英英^ル白雲」として、用いられて以来、情景描写の詩語として、唐代に至るまで、用例が多く、一々作例を挙げるには枚挙のいとまがないほどである。情景描写以外の用法として、『莊子』「外篇・天地第十二」の堯帝との問答で封人が答える言葉に「…則修^レ德就^レ閒。千歲厭^レ世。去而上^レ僊。乘^レ彼白雲」。至^レ於帝郷。三患莫^レ至。身常無^レ殃。則何辱^レ之有。…」とあり、「白雲」が用いられている。訳すれば「徳を修め、閑居して、俗世を嫌って、仙人の世界に移り、白雲に乗って、上天に行けば、心配事もなく、身に禍もなく、安楽に過ごせる。」となる。

空海は、『莊子』を典故として、用いているので、この箇所を知った上で、「白雲之人」と自称したのであろうか。或いは、波戸岡氏の指摘のごとく、^⑨若年からの山岳修行で、常に雲を友として過ごしたために、俗塵から離れた清澄な住處に居する人の意味で自称したのかも知れない。自身を喩えるに、この序文以外にも、白雲・弧雲・白霧などを用いて、出世間の遊行する人の意味をシンボライズさせている。^⑩虚空に漂う変転窮まりないもの即ち雲や霧が、心の中で、自身の行動や生き様の表象となり、常に希求している理想の状態を表すものとなりえたのである。即ち、空海は

胸奥で常に遊行僧或いは山岳修行僧の姿・青春時代の姿を追い求めていたのであろう。

「天邊」は字の通り、天のほとり、空のはての意味で用いられている。それが転じて、果てしもない、茫漠たる遠隔の場所の意味にも用いられる。ここでは、遠隔地の意味である。「天邊之吏」とした用例は「天邊之人」の用例を含めても、空海以前の漢籍・佛教經典類を検索した限りでは一例もない。空海独自の用法だといえる。「山河雲水何能阻、白雲之人、天邊之吏、何日無念」の表現は、いまにも、白雲に乗って、地の果てに勤務する貴公のもとに飛んで行きますよといった趣を感じさせる。空海独特の感性から出た語句である。

「白雲之人」の用例は、殆どないが、空海以前に一例がある。空海以後は禪宗・禅僧に白雲寺・白雲禪師など多用され「白雲」或いは「雲水」などが出家遊行僧を意味する言葉となった。ただ、空海以前の一例が皮肉にも激烈な排佛家の傳奕(五五五〜六三九)の自称の言葉として、『旧唐書』『新唐書』の「列傳」に残されている。歴史の妙と言うしかない。

二―(4) 詩体と構造

この詩は雑言詩で、二十四聯四十八句・三言句八句・五言句一句・七言句三十九句で構成されている。押韻は第一句から二十八句までの「州・柔・謀・憂・劉・啾・鳩・裘・矛・遊・儔・牛・囚・愁・抽」が下平声十八番「尤」韻。第二十九句から三十八句までの「賢・天・吞・邊・千・年」が下平声一番「先」韻。第三十九句「術」と四十六句「出」が入声第六番「術」韻。四十句から四十八句までの「匹・日・實・秩」が入声五番「質」韻である。「術」韻と「質」韻は同用韻である。この中で一見しておかしいと判るのは第二十六句である。五言しかなく、押韻も出来てい

ない、第二十六句は偶数句で、本来なら句尾に「尤」韻の字がなければならない。これについては、次節で検討するが、ここでは一応二字の欠落が句尾にあると考えておきたい。その事を表す為に欠字を示す□で示した。

二・四不同、二・六通^⑨の誤りは約半数の一八カ所ある。しかし雑言体だから、それほど厳しく適応しなくてもよいのかも知れない。

二―(5) 雑言体の詩型

平安初期に雑言詩が相当数作られ、五言・七言詩等の制作数における中国との比較において見れば、日本ではこの詩型が好まれ、盛行したと云えよう。勅撰三詩集と空海の漢詩の中での雑言詩の数は次のようになる。「」内の数字は全詩数を示す。

凌雲集	文華秀麗集	經國集	合計
六〔九十二〕	十〔百四十三〕	四十五〔二百三十〕	六十一〔四百六十四〕
空海漢詩……………五〔三十六〕			

勅撰三集で合計六十一首ある^⑩。その内容は魚歌等、短編も多く、大半は嵯峨帝主唱に対する奉和詩である。詩型は三・七言の構成が多い。

空海に五首あるが、いずれも長編で秀作である。この雑言體は空海にとって、今體詩のような定型詩でなく、比較的自由の効く詩型なので、自分のアイデアを述べることの出来る詩體であつたらしく、空海漢詩の特徴を示すものと言

この詩の四十八句の字数の構成は次の通りである。

第二十六句のように、五言句が一句のみ単独で用いられているものは、前記の六十一首の中に八首ある。その他は

雜言。奉^レ和^二太上天皇春堂五詠^一。

南(淵)永河

『経国集』卷第十一（新校『群書類従』卷第二百二十五・文書部四）

(屏)

1御春堂○

2 春堂六扇屏

3 淡墨● 圖形○ 尚可● 辨●

4 朝雲歸處巫山晴

雜言詩「贈野陸州歌并序」について

他に、弘仁期の雑言詩として、『群書類從』（巻第百三十四・文筆部十三）に所収された「雑言奉和詩」五首がある。その中の三首が五言句単独で用いられている。三首ともほぼ同じ詩型である。代表として公主有智子の「奉和 聖制江上落花詞」の構成を見ると、七・七・七・七・七・七・七・三・五・七・七・七・七・三・七・七・七・七・七・七・七・七の二十二句の詩型である。これら五言句も偶数句で用いられ、従って句尾の字は押韻している。

以上、事例となるような雑言詩を検討したが、この詩の第二十六句のような事例が見当たらなかった。

三 第二十六句「亦咨焉刃局」の検討

この節では、この第二十六句に対する、明治以前の主な注釈書の解釈と、明治以後の代表的と思われる空海全集や著作集がどのように取り扱っているかを見ておきたい。

三一(1) 明治以前の『性霊集』注釈書の解釈

前述したように、第二十六句が二字欠落している事が類推できる。この点について、明治以前の学侶・先師の解釈はどのようなになっているのであろうか。また「野陸州」がどの人物を指すのかについても、混乱があるように見える。そこで、とりあえず入手可能な下記の注釈書の二つのポイントについて検討する。

①『性霊集略注』聖範口伝真辨撰・貞応二年（一二三三）撰述。

「野陸州者 野姓也。」「第一巻・十四ウ」：特定の人物の解釈はない。故に誰を指しているか判らない。

「刃局者、以兵杖治世義歟。」[第一卷・十六オ]…第二十六句の字数・押韻についての言及は無い。

②『性靈集緘石鈔』杲宝撰・南北朝(二三五〇頃)

「野陸州者 小野陸州ノ守_ニ篁_ト云人也。此人_ハ日本三聖_ノ一人也(以下略)」十卷本・卷第一・三十六ウ…岑守を篁と誤認している。

「咨焉者 憂歎ノ貌玉云、咨子祗切嗟也。刃局者 無_ク為_ニ方_ヲ御劍_ヲ納_メ義也。」[十卷本・第一卷・四十一オ]…字数・押韻についての言及は無い。解釈は嘆かれて仕方なく劍を納め給う。

③『性靈集鈔』実翁撰・元和七年(二六二二)撰述。

「野者小野篁也。(以下略)」[卷第一・三十五オ]…岑守を篁と誤認している。

「咨焉歎貌。刃局者以兵使治世義也、一義_ニ如_レ是惡人_ヲ平_ル事不_レ及_レ力 拱_レ手也。」[卷第一・三十八ウ]…詩型について言及は無い。

④『性靈集便蒙』運敵撰・延宝二年(一六七四)刊。

「野陸州_ハ參議正四位下小野朝臣岑守_{ナリ}。(以下略)」割註に「舊説以為_レ筆者蓋誤矣。篁承和九年任陸奥守_ニ。此時未_レ可_レ稱_ニ陸州_ニ也。」[卷第一・二十二頁]…正確な解釈である。

本文「亦咨_ニ焉_ニ」刃局_ニ。注釈「説文曰。謀事曰_レ咨。後漢_ノ律曆志曰。咨_ニ焉_ヲ而以_テ從_レ事_ニ。刃局未詳。一_ニ解_ラク刃_ハ兵也、局部也。謂_ニ武臣_ニ。言_ハ訪_ラヒ謀_ニ武臣_ニ。選_ブ良將_ニ也。或人謂_ニ恐_ハ脱誤_ヲ乎。不_レ可_ニ強_テ解_ス矣。」[卷第一・二十四頁]…一応字句の脱誤に言及し、これ以上の解釈が困難であると。この句の問題点を指摘している。

⑤『性靈集私記』選者未詳・文政(二八一八)頃か

「野陸州」…言及なし。

「亦咨_ノ下_ヘ以_三武道_ヲ治_ル義也。是則治_メ陸州_ヲ遣_メ是也。此處有_二多義_一。」[天・十七頁]…多義有りとして、この句の解釈に苦慮した様子が窺える。詩型についての言及は無い。

三一(2) 明治以降の空海全集・著作集等の第二十六句の取り扱い

次に著作集等について、記述するが、先の明治以前の注釈書と同様に、何れもこの詩の平仄・押韻等について言及している事が少ない。ここで問題の第二十六句「亦咨焉_ヲ刃局_ヲ」の読みについては、おおよそ二説に分かれている。以下にそれを示す。

イ「亦焉_ニを刃局_ニに咨_ル」[「刃局」を武臣或は軍事担当の役所と解し、陸奥派遣の人事を下問されたと解釈する説である。

a 『弘法大師全集』長谷寶秀代表他編纂・明治四十三年十二月刊。第三輯・四〇四頁。

b 『性靈集講義』坂田光全撰・昭和十七年刊。二七頁。

c 『弘法大師空海全集』編輯代表宮坂宥勝・昭和五十九年八月刊。第六卷・一六八頁。

注に「局の字、韻が合わない。或は誤字か。」とされ一応押韻について触れられている。

ロ「亦た咨_ニ焉_ヲを局_ヲをむ_ヲ」[「焉」を置き字とし、「局」ではなく「局_ヲ」字と解し「とじる・おさめる」の意味を採り、帝がこのような事態を嘆かれ、戦いを止められたと解釈する説である。

d 『性靈集』（『日本古典文学大系』七二巻）渡辺照宏・宮坂宥勝校注・昭和四十年刊。一六六頁。蛇足であるがこの本の原文（漢詩）が二言・三言・四言・五言・七言等ずたずたに句読点を打たれ、全く漢詩の態を為していないのは遺憾である。

e 『定本弘法大師全集』密教研究所編纂・平成八年刊。第八巻・一二頁。

四 むすび

今まで検討したように、この第二十六句は本来七言の句でなければならぬ。何時欠字が生じたか判然としないが、筆者が確認できた最古の写本は、平安中期写とみなされている尊経閣文庫蔵本『性靈集』巻第一・一卷（コロタイプ版・高野山大学図書館蔵）、注釈書では慶応義塾図書館蔵・貞応二年（一二三三）撰述の『性靈集略注』の二本である。これにより、欠字は比較的早く、平安中期以前に生じたと思われる。

欠字は「□亦咨焉刃局□」のように、句首一字・句尾一字か、「亦咨焉刃局□□」のように、句尾二字が考えられる。この欠字を補い、正しいと思われる解釈の検討をするため、「咨焉」及び「刃局」「刃局」「焉刃」の用例を検索した。

「焉」字の用法は、文末に用いて、語気詞として、状況の認定・状態の持続を表し、置字で読まない場合が圧倒的に多い。また、文頭にある場合は疑問詞として、「いづくんぞ」と読む。文中にあって、「咨焉」のように、「咨」を動詞として用いる場合は、唐代を含め唐以前の漢詩文に用例が多くある。検索結果は殆どが「焉に咨る」の意味であっ

た。文中の「焉」は置字として使う例はなく、「咨」を形容詞として「焉」を助詞として、「なげくかのように」と読むこともできるが、後の「刃局」「刃局」に繋がらず、ここでは「咨」を動詞として考えるのが妥当と思われる。

「刃局」「刃局」「焉刃」は共に用例が全く存在しない事が判った。その事は「刃」「局」あるいは「局」と、切り離して用いられることを意味する。「刃」は誤字かもしれない。「局」あるいは「局」は欠字と結びついて用いられる可能性がある。

ただ、残念ながら、現時点の検索^⑧では、「刃局」「刃局」「焉刃」は未詳であり、欠字を推定できるような、手がかりもない事が判った。

これまでの『性霊集』の「註釈書」や「著作集」の解釈の中では、七言が正しいと明確に記述はされていないが、『性霊集使蒙』の解釈が適正で「刃局未詳：恐脱誤乎。不可強解矣」といえる。

以上で、「亦咨焉刃局」の検討を終えるが、この欠字部分がどのようなものであれ、この詩を觀賞し空海の志に想いをさせるのに妨げになるものではない。ただ、今後の『性霊集』など空海の著作集の出版には、この詩の第二十六句の二字の欠字を明確に記載されることが望まれる。

小野岑守と空海の交友は、「貧道與君遠相知」と序文に記述され「白雲之人、天邊之吏」の表現で示されているように、この秀でた人物との交友を空海自身が大切にし、共に相通じていたかをこの詩は物語っている。両者のえにしは奇しくも、嵯峨帝が空海の入京を許した大同四年七月十六日付太政官符(注①を参照)に岑守が署名したことに始まる。この官符によって、空海は史上に登場したのであり、岑守はこの官符の署名直前の大同四年四月十二日に従五位下・右少弁に昇任され、上級貴族・殿上人としての出発点となったのである。その当座はお互いに相見知っていた訳

ではないが、「遠相知」交友の遠因となっている。

以上。

【参考】この詩の先行研究には、直接主題として取り上げたものはない。そこで、先行研究の中で、多少ともこの詩に触れた論文を取り上げた。次の通りである。

A 岡田正之『日本漢文学史』昭和四年初版。「第三期・平安朝前期(漢文学隆盛時代)」第三章・弘法大師百二十九頁(昭和二十九年増補版)

空海の詩文の中で、五言「遊山慕仙詩」・雑言「贈野陸州歌」「入山興」の三詩を最も優れた詩としてあげている。しかし、その説明はなく、各詩の掲載・解釈はなく、「此等の詩は、縦横に步驟を馳せ、大師の本色を顕せりと云うべし」と評している。

B 川口久雄『日本漢文学史の研究・増補版』昭和三十九年五月刊。

①第一章「勅撰詩集と弘仁・承和期宮廷文学圈」二十二～三十三頁

三勅撰詩集に占める雑言詩の重要性を指摘され、雑言詩を六十一首と数え、その比重が高く、その事が特質の一つであるとされている。更に一つの句の字数と配列の分析で、この詩も分析されており、先の第二十六句の箇所を□で表し、傍注に五言としている。言明が無いが、その箇所を七言と想定されている。即ち二字の欠落を意味している。

②第二章「弘仁期僧団の漢文学」

雑言詩「贈野陸州歌并序」について

前段にA論文の引用があつて、空海の詩と散文の中で代表的と筆者が考える漢詩文を取り上げ、その中でこの詩の「白雲の人」と律令制を支える古代出先官僚の理想像として、第三十七句・三十八句の書き下し文を引用している。詩全体としての検討は為されていない。

- C 小島憲之『国風暗黒時代の文学・中(下)Ⅱ』昭和六十一年十二月刊。経国集の研究(一)「歸休獨臥寄高尾寺空上人・野岑守」二七一八頁。

岑守の当該詩の制作時期に関して、「……作者が陸奥守に任じられた時に空海の送別の詩があり……」としてこの詩の紹介が為されているが、それ以上の言及は為されていない。

- D 波戸岡旭『日本学・第十九号』平成四年六月発行。「空海の詩文と宮廷漢詩」二二三頁。

「白雲の人」として、脚注(九)にこの詩序からの引用として記載している。それ以上のこの詩に関する言及はない。

- E 後藤昭雄『仏教文学とその周辺』平成十年五月刊。「空海の周辺―勅撰詩集作者との交渉―」八七頁。

序文と第一句～十句、第二十七句～四十句の書き下し文を掲載しているが、この詩そのものに対する検討は殆ど為されていない。

註

①「太政官符 和泉国司／僧空海／右被右大臣 宣傳、請件僧令住京者、國宣承知、宣入京、符到奉行。／春宮亮從五位下兼守右少辨小野朝臣岑守 從七位下守右史勳○位豐長／大同四年七月一六日。」（藤原敦光撰「大師行化記」上・『弘法大師傳全集』第二・六三頁：この官符が真正であるとすれば、空海の入京を促したのは明らかに嵯峨帝であると考えられる。

②この書簡「孟春餘寒」は『高野雜筆集』巻下四十四に所収されているが、宛名と日付を欠いている。後藤昭雄氏が『仏教文学とその周辺』『空海の周辺』論攷編八四頁～九十頁で岑守宛を主張されている。従来は高木伸元氏の説「大伴国道宛・天長五年一月付」が一応の定説となっている。函説の可否は現在確定していない。

③『文徳実録』（天安元年十月十三日の条）によれば、南淵永河・菅原清人・朝野鹿取らと共に任じられている。彼等は何れも唐風文化を担う文人となり、漢詩を制作している。

④弘仁八年（八一七）七月壬辰（五日）の条「陸奥国言、俘吉弥侯部等波醜等歸降者、敕、此虜通誅已久、遊魂偷生、今守小野朝臣岑守等、優彼野心、令服聲教、懷携之權、誠以嘉尚。」『類聚国史』「百九十・俘囚」

⑤小野岑守の伝記等まとまった研究は無いが、岑守と嵯峨天皇の交遊に付いては、金原理『平安朝漢詩文の研究』「小野

岑守考」がある。

⑥後藤昭雄『平安朝漢文学論考』『嵯峨朝詩人の表現―文学空間の創造』において、この表現方法について、指摘があり、詳しく分析がなされている。

⑦波戸岡旭『空海の詩文と宮廷漢詩』『日本学』第十九号：この論文は空海の山岳観が宮廷漢詩に及ぼした影響を論じ、「白雲の人」即ち「山林修業者」とされている。

⑧例えばA「蒼嶺白雲観念人」（勅賜屏風書了即獻表并詩）

B「孤雲無定處」（贈良相公詩） C「遊空白霧忽歸岑」（留別青龍寺義操阿闍梨）などで、自身を喻えるのに用いている。

⑨『旧唐書』巻七十九・列傳第二十九：「因自為墓誌曰『傳奕、青山白雲人也。因酒醉死、嗚呼哀哉！』」と記載されている。『新唐書』巻百七・列傳第三十三にも同じ文言の記載がある。

⑩二・四不同、二・六通は全ての詩賦に適用される平仄の原則である。作詞作法上の最も基本的な法則とされている。「二・四不同」は一つの句の中の二字目と四字目の字は同じ平仄を用いてはならないこと。「二・六通」は一つの句の中の二字目と六字目の字の平仄を同じにしなければならないこと。漢字の発音には「平声・上声・去声・入声」の四声があるが、平声以外の三声を仄声としている。韻文の場合、発声のリズムを取る為に、一句の中の字の平仄の順序を重視する。一般的に定型詩・特に今體詩になればなるほど、この原則を

厳密に適用している。ただ我国では中国語の四声の区別を耳で判別する事が困難のため、勅撰三漢詩集に収載されたものにも、相当数の平仄の誤りが見出せる。空海の漢詩は押韻の間違ったものは一つもないが、平仄の間違いは間々見出せる。

- ⑪ 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究・増補版』二十二頁で雑言詩について、言及され、三詩集の雑言詩の数を六十一首と数えられている。何かの間違いか、総数は一致したが三集の内訳が氏の論文と異なる。以下「三集を通じて五言は一八三首、七言は二〇〇首に対して、雑言詩は六一首（凌雲集六首、秀麗集四三首、経国集四三首）存しており、全体四四首に対して約十四％に及んでいる。」と記述されている。
- ⑫ 検索は中央研究院（台湾）「漢籍電子文獻」の「漢籍全文資料庫」を検索した。この資料庫には(1)史書（二十五史他）(2)経書と子書（十三經と諸子百家他）(3)宗教文獻（仏教—大正新修大藏經と道教他）(4)医薬文獻（本草綱目他）(5)文学と文集（文選・全唐文他）(6)政書、類書と史料聚編（通典・藝文類聚他）などが含まれており、殆どの漢籍文獻が網羅されている。現時点では最上の検索文献だと考える。